

子ども家庭福祉に関し専門的な知識・技術を必要とする支援を行う者の資格の在り方 その他資質の向上策に関するワーキンググループ」ヒアリング資料

北川聡子（ファミリーホーム協議会）

① フォスターリングに求められる人材

支援を受けていい

ファミリーホームに来る子どもには幅広いニーズがある中でまだまだホームの頑張りで養育しているところがある。社会的養護が必要な様々なニーズのある子どもが安心安全を感じ、その子その子にあった成長のために、SWは里親さんが「社会的な支援を受けてもいい」ということは当たり前のこととなり、ファミリーホームや里親自身が孤立しないで養育ができるようにニーズに合わせてソーシャルワークをしていただきたい。

支援をしっかりと受けることで、施設を転々としたケアニーズの高い子どもの養育が可能となった事例もある。

リスペクト

・里親やファミリーホームの方々は「自分たちの生き方」として家庭養育を担い社会的養護の必要な子どもの養育を選択している。そのため受け入れて育てている一人ひとりの子どもへの思いは強い。SW から見るといろいろな課題が見えたとしてもまずは、24 時間 365 日養育している里親に対してのリスペクトを基本にして対応していただきたい。

喪失感への対応

・里親さんのそのような「子どもへの思い入れ」があるから、子どもが少しずつ安心感を獲得し成長につながっていく。その結果、里子と別れる時の喪失感は大きい。不調の時の別れだけではなく、良い形での移行であっても、悲しみや喪失感を感じる。

私自身 4 年間育てた自閉症の子どもと別れる時に受診した児童精神科医が「この子の人生の土台を、あなたが創ってくれましたよ。」と言ってくれた。Dr.の前で号泣し、別れることの覚悟が出来た経験がある。

このように喪失感を持つ里親に対してSWはこの気持ちに寄り添い、別れの時、自立の時、話し合う時間や振り返りの必要性があり、一生懸命育てたからこそ悲しみを感じるし、里子も里親も悲しんでいいということを理解していただきたい。そのプロセスが、里子と里親にとって次へのいい未来につながると思う。

専門性

・ファミリーホームや里親に委託される子どものほとんどは、トラウマを抱えているし、発達に困り感のある子どもが多い。発達、アタッチメント、トラウマ、DV、子ども虐待の影響、実子も含めた家族全体の関係性の影響・家族システム等の知識・専門性を持ち、対応していただきたい。

・子どものアセスメント・里子と里親さんにとって無理のない援助計画を立て、そのファミリーホームや里親さんに合わせて実行できる等、サポートする力が必要である。

多様性

・ファミリーホームや里親家庭の文化と、子どもが育ってきた文化や背景・発達の特性などが違う。そのような子どもを家庭に向かい入れることは、多様性が求められる。子どもの発達特性・生活リズム・食習慣・睡眠など育ちの中で学習してきたことを無理やり里親家庭に合わせるのではなく、その子その子にあった養育が必要になる。子どもの育ちの多様性を受け入れる養育からスタートしないと不調になってしまう場合もある。SWには、子どもが新しい家庭に来て安心安全を少しずつ感じていくように、その違いのプロセスを一緒に考えて養育を支えていただきたい。

協働

・困り感のある時はもちろん、子どもの成長を一緒に喜んでほしい。一人ではない、一緒に子どもの成長を喜んでくれる存在は里親としての喜びにつながる。=子どものことをよく知っていてほしい。

意見表明権

・DV等の環境で育った子どもの思いと、実親の思いと相反することがある。里親は身近で子どもの思いを聞いているため子どもの側に立つことができ、実親から攻撃されることがある。子ども意見表明権などが守られるようにDVの専門知識を身につけてソーシャルワークをしていただきたい。DVの対応は困難性があるためSWもチームであること、SVを受けることが必要であると思う。

・何よりも子どもに敬意を払い、自尊心を高める関わりをし、子どもの力を信じ、気にかけてくれる存在であってほしい。

地域とつながる

・社会との良い関係性・エンゲージメントが子どもにも里親さんにも必要です。里親・ファミリーホームだけの孤立した養育では子どもが育たない。個人でつながることにも難しさがある。SWが必要な関係機関(児相・学校・病院等)の役割を理解しつながるための支援を

してくれることが安心・安全な社会的な養育につながる。

② 地域の子育て支援においてソーシャルワークが果たす役割

児童発達支援センターの68.7%に社会的養護の必要な子どもが通園している。(日本知的障害福祉協会発達支援部会) その数は年々増加している。

障害のある子どもの子育ては、障害の受け入れの課題・子育ての困り感も高いため虐待のリスクが高い。加えてお母さん自身が、AL・GA・虐待(心理的・身体的・性的・ネグレクト)の環境であった機能不全家族で育っている場合、精神疾患等、DVの被害がある困り感の高く自分自身が生きるのに精一杯の中で子育てしているお母さんにはより一層の支援が必要である。このように地域にはたくさんの困り感を抱えた子どもと家族が住んでいると実感している。地域の子育て機関は、子どもへの発達支援だけではなく家族支援も重要です。むぎのこ児童発達支援センターでは、これらの課題に対して子どもへの発達支援は、必要な場合は夕方までの支援を行う。お母さんたちには、個別カウンセリング、グループカウンセリング・ペアレントトレーニングなどの心理支援、親子発達支援・当事者のあつまりである自助グループまた、子育てが大変な時は、ショートステイ(一時保護も含む・20床)の利用、家庭への子育て支援としてヘルパー、食事等の生活支援行っている。また24時間のSOS電話など、トータルに家庭を支えて虐待予防・安定した暮らしにつなげている。

それらの支援のスタートは、保育士が現場で子どもやお母さんの困り感をキャッチすることから始まる。支援を拒否する場合も、お母さんの話をよく聞き共感する。その後少しずつ支援を受け入れ、お母さん同志の結びつきも出来、エンパワーメントされる。

この例は、児童発達支援センターでのソーシャルワークであるが、地域子育て支援拠点や保育園、またSNSなどを通じて相談でき、一緒に課題に取り組める場が必要です。

北欧や米国でも、相談は専門性や知識は当然必要であるが、加えて専門性の高さに「気さくさ」が挙げられている。誰にも言えないことや辛い気持ちや弱さを語ってくれるためにはこの「気さくさ」が必要であると思う。

また相談を受けた時、子育てがうまくいかないことは、これまでの育ちや経験・環境が大きいので、お母さんのせいにしないでお母さんたちのこれまでの大変さや努力をねぎらうことも大切である。

そういった意味でSWは、パターンリズムに陥らないで、多様性を尊重し、当事者の力を重視し、子育て中のお母さん・お父さん・子どもへのリスペクト、子育ての専門性を持ち、子ども達のために他機関との協働する力が必要である。